

「前」の特性と削除に基づく後置詞句構造について
(キーワード：前・後置詞、文法化、統語構造、削除)

綾野 誠紀 (亜細亜大学)

本研究では、場所を表す名詞が、前・後置詞へと文法化することにより派生される前・後置詞句の構造について検討する。Ayano (2001)、Svenonius (2006, 2010)、Watanabe (2009)の前・後置詞及び前・後置詞句に関する分析提案並びに削除に基づく予測を行い、前・後置詞句の構造解明に貢献することを目指す。

英語の“front”には名詞用法と前置詞用法の2種類がある。(1a)は直前と直後にそれぞれ“the”と“of”が現れる名詞用法である。一方、(1b)では、“of”が“front”に後続するものの、“front”は前置詞として機能する。つまり、“bus”を空間上の参照基準とした上で、“John”をバスの車外前面の空間に位置付け、さらに、“in”が場所を限定している。この“front”の特性の違いは、解釈にも反映される(Ayano 2001, Svenonius 2006)。

- (1) a. John is sitting in the front of the bus. バスの前方の席に座っている (バス車内)
b. John is sitting in front of the bus. バスの前に座っている (バス車外)

以下の(2)の日本語の「前」にも英語同様に2種類の解釈があることから、英語の“front”と並行する特性を持っていると考えられる。

- (2) ケンがバスの前に座っている (こと) バス車内/車外

以上の解釈の違いに加え、英語の2種類の“front”の特性を示す事実として、尺度表現との共起がある。(3a)の名詞用法の場合には共起不可なのに対し、(3b)の前置詞用法の場合には共起可である(Svenonius 2006)。

- (3) a. *A kangaroo is sitting three feet in the front of the bus.
b. A kangaroo is sitting three feet in front of the bus.

(4)は、日本語についても同様の事実が得られることを示している。

- (4) ケンがバスの3メートル前に座っている。

ケンがバスから3メートル前の場所(車外)に座っている解釈のみが得られる。

つまり、尺度表現が可能なのは、後置詞用法の「前」のみである。以上の事実について、Svenonius (2006)は、“front”や「前」を Ax(ial)Part として捉え(cf Jackendoff 1996)、前・後置詞句の構造を以下のように提案している。

- (5) [Deg three feet [Place in [AxPart front [K of [DP the bus]]]]]

Svenonius (2006)によると、AxPart は主に名詞から派生した前・後置詞であり、DP “bus”に基づき、三次元の軸上の領域を示す（上部、下部、前面、後面、側面等）。さらに場所を表す Place は、AxPart が表す領域から投射された空間を指定する。つまり、バスの前面の領域の中に (1b)の“John”や (3b)の“a kangaroo”が存在することを表す。

さらに、英語には、(5)の語順しかないが、日本語では語順に自由度がある。先ず、日本語では、空間次元を表す「ところ」が顕示化することが可能である。

(6) ケンの3メートル前(のところ)にエリがいる。 (Watanabe 2009)

(6)では、AxPart の「前」と Place の「に」の間に「ところ」が現れている。さらに、(7)が示す通り、「前」は尺度表現の「3メートル」の前にも現れることもできる。なお、その場合、「ところ」は義務的に顕示化する。

(7) ケンの前3メートル*(のところ)にエリがいる。

Watanabe (2009)は、(6)と(7)について、それぞれ(8a)と(8b)の構造を提案する。

(8) a. [[DP ケン]_k [DimP [#P 3メートル [PnP [RP *t_k* R] [Pn 前]] #] [Dim ところ]]]

b. [[DP ケン]_k [DimP [PnP [RP *t_k* R] [Pn 前]]_j [#P 3メートル *t_j* #] [Dim ところ]]]

上述した Svenonius (2006, 2010)と同じく、Watanabe (2009)は「前」を名詞から派生した後置詞類の Pn であるとする。Pn 「前」は、[DP ケン]を補部に取り DP を参照点とする R(eference)P を補部として PnP を投射する。なお、R が顕在化する場合には、「から」として現れると提案する。さらに、尺度表現の3メートルは、数の主要部#の指定部として、また、「ところ」を空間の次元を表す Dim(ension) 主要部として分析する。(8b)で示す通り、Dim 「ところ」が義務的である場合には、PnP がその指定部に移動する。この Watanabe の分析提案が正しく、さらに、#とその指定位置にある尺度表現が文法一致していると仮定すると、VP-ellipsis や N'-deletion のように(Lobeck 1990, 1995, Saito & Murasugi 1990)、#の補部である PnP は、削除の対象となることが予測される。その構造を(9)に示す。

(9) ...[DimP [#P 3メートル ~~[PnP...前]~~ #] [Dim ところ] ...

(10)は予測が正しいことを示している。

(10) a. ケンはステージから3メートル前のところに座っているが、

b. エリはステージから2メートル~~[PnP...前]~~のところに座っている。

なお、「前」と同様の特性を持つと考えられる「後ろ」、「脇」、と置き換えても同

様の結果が得られる（ただし、ステージの後ろや脇にも座席がある場合）。

削除に基づき前・後置詞の特性及び前・後置詞の構造を解明する試みは Takita & Goto (2013), Takahashi (2020)等があり、本研究はそれらに続くものである。

参考文献

- Ayano, Seiki. 2001. *The internal structure and external syntax of PP*. Ph.D. dissertation, University of Durham.
- Jackendoff, Ray. 1996. The architecture of the linguistic-spatial interface. In *Language and space*, ed. by Paul Bloom, Mary A. Peterson, Lynn Nadel, & Merrill F. Garrett, pp. 1-30. Cambridge, MA: MIT Press.
- Lobeck, Anne 1990. Functional heads as proper governors. *NELS* 20. 348-362.
- Lobeck, Anne 1995. *Ellipsis: Functional heads, licensing, and identification*. New York: Oxford University Press.
- Saito, Mamoru and Keiko Murasugi. 1990. N'-deletion in Japanese: A preliminary study. *Japanese/Korean Linguistics* 1. 258-301.
- Svenonius, Peter. 2006. The Emergence of Axial Parts. *Nordlyd, Tromsø Working Papers on Language & Linguistics* 33. 49-77.
- Svenonius, Peter 2010. Spatial P in English. In *Mapping Spatial PPs: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 6*, ed. by Guglielmo Cinque & Luigi Rizzi, pp. 127-160. Oxford: Oxford University Press.
- Takahashi, Hisako. 2020. Cross-linguistic variations in the layered structure of PP: Evidence from PP internal NP-ellipsis. *Variation in P: Comparative approaches to adpositional phrases*, ed. by Jacopo Garzonio & Rossi, Silvia, pp. 191-217. Oxford: Oxford University Press.
- Takita, Kensuke & Nobu Goto. 2013. On (im)possible N'-deletion within PPs. *Nanzan Linguistics* 9, 215-231.
- Watanabe, Akira. 2009. Measure phrases in PP. In *The Proceedings of the Tenth Tokyo Conference on Psycholinguistics*, ed. by Yukio Otsu, pp. 1-25. Tokyo: Hituzi Syobo.

日本語の軽動詞構文：節連結と共分析による記述

中村 渉（東北大学）

キーワード：軽動詞，複文構造，複合述語，共分析（coanalysis）

日本語の軽動詞構文は，Grimshaw and Mester (1988)以来，多くの理論的分析の対象となってきた。特に，動作名詞の品詞と機能，項構造の由来，「動作名詞＋する」の派生，「する」の統語的・意味的性質が議論の焦点となってきたが，軽動詞構文は形式的には複節的であるが，項転移，編入，項上昇等の統語的操作により単節化された構文として分析されてきた（影山 1993；岸本 2024）。

本発表は Role and Reference Grammar [RRG]（Van Valin 2005）の述語意味論と複文構造の分類を採用し，例文(1a-c)のような軽動詞構文の動作名詞は（英語の動名詞等と同様に）指示機能と述定機能を同時に担い，名詞として格標示を受けながら，述語として項構造も伴うと考える（Hudson 2003；cf. Malouf 2000）。

- (1) a. 太郎が 課長に 事故を 報告した／していた。
b. (??)太郎が 課長に 事故を 報告を した。
c. 太郎が 課長に 事故について 報告を した／していた。
- (2) a. 課長に 事故について 報告だ。
b. 課長に 事故について 報告は 必要？

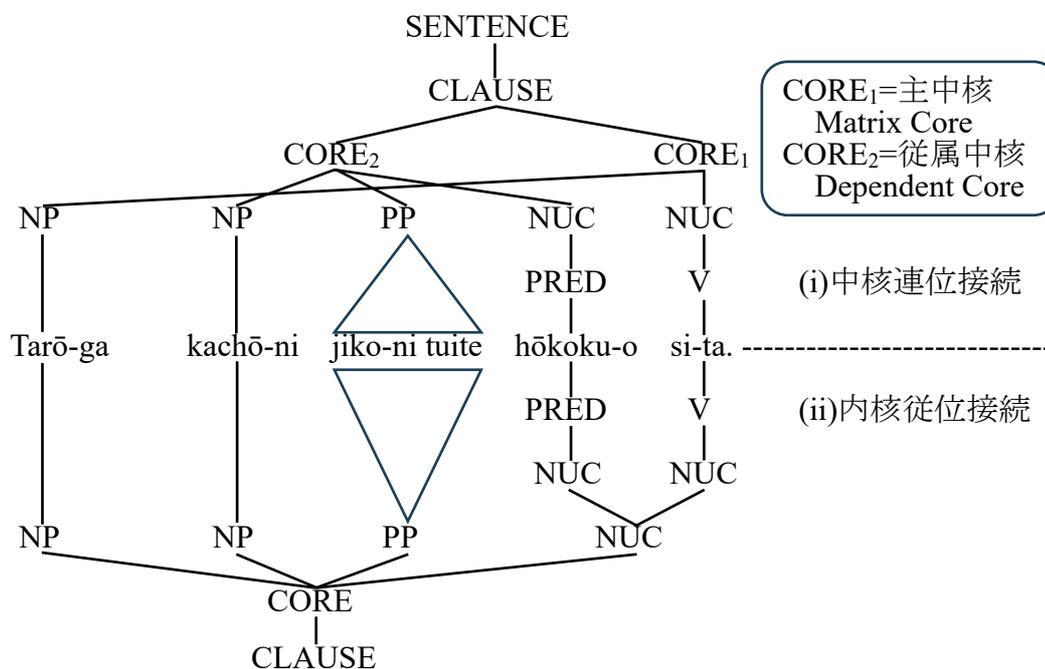
RRG は単文を次の 3 層の層状構造（①述語に相当する内核，②述語とその項から成る中核，③中核とその修飾詞から成る節）に分ける。複文は 3 層のどれを結合するかを示す接続（内核／中核／節同士の結合）及び各層がどのように結合されるかを示す接合（等位／連位／従位）の組み合わせにより 9 通りに分類される（例：内核従位接続，中核連位接続，節等位接続）。

本発表は，上述の RRG の複文の類型論と動作名詞の機能的両義性を踏まえて，軽動詞構文を接続・接合の組み合わせ（節連結）により分析する。具体的には，(1a)のような軽動詞構文を単節的な内核接続構文として分析する一方，(1b,c)のような動作名詞が対格標示を受ける軽動詞構文では単節的な内核接続構文と複節的な中核接続構文が平行して存在している（共分析）と提案する。

上の提案を以下で具体的に説明する。まず，(1a)で内核を修飾するアスペクト形式テイルは「する」のみならず，動作名詞「報告」も作用域に入れる。この操作子共有は，(1a)が「報告」及び「する」が複合述語を構成する内核接続を伴う

単節であることを示す。次に、(1a)のように動作名詞の直後に「する」が続く場合、主語項は動作主の他に、被動者（例：水が蒸発した）、経験者（例：太郎が事情を理解した）でもよい。この事実は「する」が特定の意味役割を指定しない繰り上げ動詞で述定機能を持たないこと、このため、(1a)は述定機能を持つ動作名詞に「する」が従属する内核従位接続であることを示している。

(1a)と同様に、(1c)でもテイルは「する」と対格標示の動作名詞の両方を作用域に含んでいるため、(1c)も内核接続を伴うと一応考えられる。ただし、(2a,b)が示すように、「報告」とその2つの非主語項（「課長」と「事故」）の全体は判定詞の作用域に入ると共に主題化の対象にもなる。これは(1c)の動作名詞とその非主語項に統語的一体性があり、中核（この場合、述語である動作名詞とその項が構成する層）を構成していることを示している。上の従属中核は「する」が述語である別の中核（主中核）と結合し、両中核が主語項を共有する中核接続（より具体的には、中核連位接続）を構成すると考えられる。以上から、(1c)のような軽動詞構文は（すぐ下の図が示すように）内核接続と中核接続のいずれとしても解釈可能な構造的両義性（いわゆる「共分析」）を伴うと考えられる。



最後に、上述の構造的両義性は(1b)のような例文の容認度の揺れ（影山 1993: 314-320）の説明に貢献する。(3a,b)は Google 検索で得られた同種の例である。

- (3) a. 時効により、過払い金^を返金^をしてもらえる権利が消滅...
- b. 電子的に植物検疫証明書^を受領^をすること...

まず、「中立読み」で(1b)を読むと、同一中核内に 2 つの対格名詞があることになり、「二重ヲ格制約」(Harada 1973)違反が生じる。一方、「事故を」に強勢を付与すると、「事故を」と「報告を」の間に音韻句の境界が現れるが、韻律的な境界と統語的境界は一致する傾向が強いため、統語的境界が 2 つの対格名詞の間にあると解釈の方が自然である (Selkirk 2011)。この場合、「事故を」は従属中核の内部にあるが、「課長に」と「事故を」を意味的項として伴う「報告」に付く対格助詞は従属中核全体を標示しているという複節的解釈が可能になる。このため、(1b)は「二重ヲ格制約」には抵触せず、文の容認度が上がる。

このように、(1b)の容認度の変異を説明できる点は(1c)のような軽動詞構文が完全に単節化された構文ではなく、内核接続(単節)と中核接続(複節)という構造的曖昧性を保っているという本発表の分析を支持する根拠となる。

参考文献

- Grimshaw, Jane and Armin Mester. 1988. Light verbs and θ -marking. *Linguistic Inquiry* 19(2), pp.205-232.
- Harada, S.I. 1973. Counter Equi NP deletion. *Annual Bulletin, Research Institute of Logopedics and Phoniatics* 7, pp.113-147.
- Hudson, Richard. 2003. Gerunds without phrase structure. *Natural Language and Linguistic Theory* 21(3), pp.579-615.
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』東京: ひつじ書房.
- 岸本秀樹. 2024. 「軽動詞構文」加賀信広・岸本秀樹『文の構造と格付与』, pp.73-101. 東京: 開拓社.
- Malouf, Robert. 2000. Verbal gerunds as mixed categories in Head-Driven Phrase Structure Grammar. In Robert Borsley (ed.), *The Nature and Function of Syntactic Categories*, pp.133-166. London: Academic Press.
- Selkirk, Elizabeth. 2011. The syntax-phonology interface. In John A. Goldsmith, Jason Riggle, and Alan C.L. Yu (eds.), *The Handbook of Phonological Theory*, 2nd edition, pp.435-484. Oxford: Wiley-Blackwell.
- Van Valin, Robert D., Jr. 2005. *Exploring the Syntax-Semantics Interface*. Cambridge: Cambridge University Press.

Morphological Process and Analogical Effects in Demonym Formation in French: Proposal of a DM Account

Mamoru Yakuwa (Aoyama Gakuin University)

Keywords: affix rivalry, Distributed Morphology, analogy, morphonology

Demonym formation: Demonym is a name of inhabitants or adjective of a place name (toponym). In French, demonyms are formed by suffixation as well as English or other European languages. That is, the demonym for Paris is *paris-ien/-ienne*, *Niç-ois/-oise* for Nice, *Tokyo-ite* for Tokyo etc. Each suffix has the same function, so this formation is treated as affix rivalry. (Thuilier et al. 2023, Huygevelde et al. 2025 etc.)

Aim of this presentation: French demonym formation has been studied in linguistic approaches and non-linguistic ones. The linguistic approaches mainly focus on phonological properties: suffix selection is determined by the final segment of the toponym or its length. However, those studies do not focus on computational process to create new demonyms. I assume that analogical effects have an influence on neologism of demonyms and phonological properties are checked at the end of computation. Then, this presentation proposes a framework of Distributed Morphology (DM; Halle and Marantz 1993, Harley and Noyer 1999 etc.) is suitable for demonym formation.

Optionality of suffix selection: Thuilier et al. (2023) pointed out that phonological effects have statistically greater importance in suffix selection than other factors. This same study and Huygevelde et al. (2025) suggest that dissimilation (especially about features [\pm back] and [nasal]) of segments between toponym and suffix works in suffix selection. Dissimilation is represented as a constraint of Obligatory Contour Principle (OCP). Examples in (1) show an OCP effect and corresponding repair strategy in Ainu.

(1) OCP effect in Ainu (Shibatani 1999, 13)

a. /ku-kor-rusuy/ → ku kon rusuy b. /kor-rametok/ → kon rametok

1.PL.NOM-have.PL want

have bravery

In Ainu example, there is an evident repair strategy against the violation of OCP_[rhotic]. That is, when [r] precedes its identical segment, [r] changes to [n]. However, the problem

in demonym formation is that this type of repair strategy does not exist. (2a) is an example of official demonym and (2b,c) shows demonyms created by native speakers. Even though *nantais* is the official demonym for Nantes, another form *nantois* was observed. This means that suffix selection in demonyms is unstable and does not have a repair strategy.

(2) Competition of official and created demonyms (Eggert 2002, 34)

Nantes > a. *nant-ais* b. ?*nant-ois* c. *?*nant-ien* (not observed in Eggert 2002)

Analogy in DM: DM takes Root hypothesis, late insertion, and underspecification as a basic concept. A category-unspecified Root as in $\sqrt{\text{TSUKUBA}}$ becomes a toponym by a merge with [+N]. Category is determined after the syntactic operations in DM. Donym formation differs from the derivation of $\sqrt{\text{TSUKUBA}}$ into $[_N\text{Tsukuba}]$. This research argues that demonyms are derived after the category is determined. This difference can be accounted by concept of Root-derivation and Word-derivation (Arad 2003). Donym is derived through a merge of toponym (Word) and suffix. Then, how a speaker chooses one suffix from competitive environment? This talk suggests that analogy plays a role in suffix selection. Analogy is based on non-linguistic parameters as in geographical features. Thuilier et al. (2023) propose that the suffix *-ien* favours toponyms that are not a cities: it favours areas (*Eurasie* ‘Eurasia’, *Amazonie* ‘Amazon’, or *Angleterre* ‘England’). On the contrary, suffix *-ais* favours cities. Moreover, they observed that geographically close toponyms tend to share the same suffix. These non-linguistic effects are treated as *Encyclopedia* in DM structure. According to Harley and Noyer (1999), *Encyclopedia* has an impact on the Conceptual Interface (Meaning). Therefore, it is an effect for logical form (LF) which is spelled out. This talk assumes that speakers analyse the LF of existing demonyms and apply the analysed suffix. At the back side of LF spell-out, morphological operations are spelled out to phonological form (PF). Phonology filters out phonologically ill-formed PFs in view of some constraints. (e.g. $\text{OCP}_{[\pm\text{back}]}$ and $\text{OCP}_{[\text{nasal}]}$)

Analogical effects are major concept in construction morphology and not sufficiently discussed in DM. Therefore, this challenge can be a novel account. I support my analyses

by referring the evidence from municipal vote to decide an official demonym such as *Aindin-ois/-oise* for *Ain*, for which the vote was conducted in 2018.

Selected references

- Arad, Maya. 2003. "Locality Constraints on the Interpretation of Roots: The Case of Hebrew Denominal Verbs". *Natural Language & Linguistic Theory*. 21 (4). pp.737-778.
- Eggert, Elmar., Maurel, Denis. and Piton, Odile. 2003. "La formation des gentils sur internet". *Revue québécoise de linguistique*. 32 (1). pp.25-39.
- Halle, Morris. and Marantz, Alec. (1993). "Distributed morphology and the pieces of inflection". K. Hale & S.J. Keyser (eds.) *The View from Building*. 20. pp.111–176.
- Harley, Heidi. and Noyer, Rolf. 1999. "Distributed Morphology". *Glott International*. 4 (4). pp.3-9.
- Huygevelde, Marie., Kayrici, Ridvan., Bonami, Olivier. and Hemforth, Barbara. 2025. "Affix rivalry in French demonyms: an experimental approach". *Lexique*. Special number. pp.31-51.
- Shibatani, Masayoshi. 1990. *The Languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Thuilier, Juliette., Tribout, Delphine. and Wauquier, Marine. 2023. "Affix rivalry in French demonym formation: The role of linguistic and non-linguistic parameters". *Word Structure*. 16 (1). pp.115-146.

分散形態論における循環性について

大野 公裕／北海道大学（名誉教授）

キーワード：分散形態論 循環性 フェイズ不可侵条件 派生接辞 転換

【本発表の主張と議論の流れ】分散形態論における語彙挿入は Chomsky (2000, 2001)で提案された(1)のフェイズ不可侵条件（以下、PIC）に従って循環的、局所的に行われる。Marantz (2001), Embick and Marantz (2008), Embick (2010)は、以下の(2)の構造において語根 R は PIC によってフェイズ主要部 y からアクセスできない（y から R が見えない）と仮定している。

(1) *Phase-Impenetrability Condition* (PIC) (Chomsky 2000)
In phase α with head H, the domain of H is not accessible to operations outside α , only H and its edge are accessible to such operations.

(2)

```
graph TD
  R --- alpha
  R --- beta
  alpha --- x
  alpha --- y
  beta --- alpha
  beta --- y
```

x, y = categorizers (phase heads): n, v, a, etc.
 α, β = phases

本発表ではいくつかの経験的証拠に基づき、この Embick–Marantz（以下、E&M）の仮定に反して、R は（x と同様に）主要部 y からアクセスできると主張する（その理由については発表の最後に考察する）。E&M の仮定では、[[R-x(aff₁)]-y(aff₂)]（aff は接辞）の2つの派生接辞の組み合わせにおいて y からは x しか見えないため、y の語彙項目（y ↔ aff₂）の文脈では x(aff₁)を選択するかしないかのどちらかになる。選択すれば[[R-x(aff₁)]-y(aff₂)]の語形は常に原理的に可能となり、選択しなければ常に不可能となる。しかし、実際には R に応じて可能な語形と不可能な語形の両方が存在する場合がいくつか見られる。

本提案では、問題の構造において、y の語彙項目の文脈として x(aff₁)だけでなく R を選択する（あるいはしない）可能性が得られるので、E&M の仮定で問題となる2つの派生接辞の組み合わせの可能性・不可能性を正しく捉えることができる。また、転換（conversion）を[[R-x(aff)]-y(∅)]の構造を持つゼロ接辞化として扱うことが可能となり、例えば名詞転換動詞（fly, spit, grandstand など；Kim et al. 1991 参照）の過去形がなぜ規則変化を起こすのかが説明できる。

【派生接辞①】以下の(3)における X-os-ity という語形（Aronoff 1976: 44 参照）について、E&M は(3a)の不可能な例から -ity は -ous を選択しないと仮定し、

*[[X-ous]-ity]はすべて不可能であるとする。そして、(3b, c)の可能なものについては[X-ous]を一つの語根とし、[√curious-n(ity)], [√porous-n(ity)]のように分析している (Marantz 2001, Embick and Marantz 2008)。しかし、例えば√poreと√porousをそれぞれ別の語根とすると、両者の意味の共通性を捉えることができないという問題が生じる。

- (3) a. glory~glorious~*gloriosity, fury~furious~*furiosity, etc.
 b. *~curious~curiosity, *~precious~preciosity, etc.
 c. pore~porous~porosity, monster~monstrous~monstrosity, pomp~pompous~pomposity, etc.

これに対して、本提案では[[X-ous]-ity]において-ityから[X-ous]が見えるので、(4)のような語彙項目を設定することができ、(3)の3つのパターンを問題なく扱うことができる ((3a)については(4)のRが√glory, √furyを含まないことで説明される)。そのためには、(2)のyから[R x]が見えなければならない。

- (4) $n \leftrightarrow \text{-ity}/\{\text{[R-ous]}, \dots\}__$: R = √curi, √pore, ...

【派生接辞②】 [[X-ment]-al]の構造においても、E&Mの仮定では-alから-mentしか見えないため、以下の(5a, b)の違いが説明できない。(5a)の[X-ment]を一つの語根とすることが考えられるが、上記と同じ問題が生じる。一方、本提案では-alから[X-ment]が見えるため、(6)の語彙項目で両者の違いが説明できる。

- (5) a. government~governmental, development~developmental, etc.
 b. discernment~*discernmental, treatment~*treatmental, etc.
 (6) $a \leftrightarrow \text{-al}/\{\text{[R-ment]}, \dots\}__$: R = √govern, √develop, ...

【転換】 分散形態論ではゼロ接辞を仮定するが、E&Mの仮定では一般に[R-x(aff)]から[[R-x(aff)]-y(∅)]の語形(真の「転換」)を派生することができない。なぜなら、yからはx(aff)しか見えないため、 $y \leftrightarrow \text{-}\emptyset/\text{[x, aff]}__$ のタイプの語彙項目を設定することになるが、そうすると、ある接辞を持つ語はすべてある別の範疇の語に転換できることを予測する。しかし、これは明らかに事実と反する。

これに対して、本分析ではyから[R-x(aff)]が見えるため、[[R-x(aff)]-y(∅)]の構造を持つ可能な転換形と不可能な転換形(例: 名詞としての repellent vs. *excellent)を区別することができる。また、名詞転換動詞の fly(「フライを打つ」)は不規則動詞の fly([√fly-v(∅)])とは異なり[[√fly-n(∅)]-v(∅)]の構造を持ち、その外にあるTからはv(∅)しか見えないため、flyが規則変化を起こすことが説明できる。さらに他の転換例も検討することによって、転換は本提案の予測通り、ゼロ接辞yから[R-x(aff)]が見える場合に限られることを論じる。

【まとめ】分散形態論における循環性に関して、語根 R を含む循環領域（いわゆる内部領域 (inner domain)）を(2)の α だけでなく β も含めるように拡張する必要がある。この変更は、連続する 2 つの派生接辞の可能性を正しく記述できるだけでなく、特に転換を扱うことが可能になるという利点を持つ。そして最後に、(2)の R がなぜ y からアクセス可能なのかという問題については、語根の特性が関係している可能性を探る。

【参考文献】

- Aronoff, Mark. 1976. *Word formation in generative grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries: The framework. In Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, eds., *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, 89-156. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2001. Derivation by phase. In Michael Kenstowicz, ed., *Ken Hale: A life in language*, 1-52. Cambridge, MA: MIT Press.
- Embick, David. 2010. *Localism versus globalism in morphology and phonology*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Embick, David, and Alec Marantz. 2008. Architecture and blocking. *Linguistic Inquiry* 39.1, 1-53.
- Kim, John J., Steven Pinker, Alan Prince, and Sandeep Prasada. 1991. Why no mere mortal has ever flown out to center field. *Cognitive Science* 15, 173-218.
- Marantz, Alec. 2001. Words. Handout of a talk, MIT.

三層モデルから見た日英語のメタ言語否定

廣瀬幸生（筑波大学名誉教授）

私はこれまで、自己表現としての主体性という観点から、日英語の意味・語用論的対照研究に取り組んできた。その過程で、話し手を思考主体としての「私的自己」と伝達主体としての「公的自己」に分けて捉える話し手解体論の重要性を指摘するとともに、それを組み込んだ「言語使用の三層モデル」という考え方を提唱するに至っている。これは、簡単に言うと、言語使用は「状況把握」、「状況報告」、「対人関係」という三層からなり、言語のもつ基本的な自己中心性が英語のように公的自己にあるか、日本語のように私的自己にあるかによって三層の組み合わせが異なるとする理論である。三層モデルは、言語の意味・語用論的対照研究を行うための共通基盤と、それを相対化する仕組みの両方を備えており、それによって言語間の相対的違いを体系的に説明することを目指すものである（Hirose (2015), 廣瀬ほか (2017, 2022), 廣瀬 (2024a, b)など）。

本講演では、三層モデルの有用性を示す例として、日英語におけるメタ言語否定の現象を取り上げ、その共通点を踏まえ、たうえでその相違点がどこからくるかを問題とし、それが三層モデルでは原理的に説明可能であることを論じることにしたい。

メタ言語否定との関係でよく引き合いに出される英語の例として(1)があり、これには二通りの読みがある（Horn (1985, 1989)など）。一つは、フランス王は禿げていないという否定的事態を主張する「記述否定」の読みであり、もう一つが「メタ言語否定」の読みである。これは、先行話者が *The king of France is bald.* と言ったのを受けて、その発言の適切性を否定し、異議を申し立てる用法である。(2)の文脈がその例で、そもそもフランス王などは存在しないので、フランス王は禿げているという主張は意味がなく、受け入れられないということである。

(1) *The king of France isn't bald.*

(2) *The king of France isn't bald; there is no king of France.*

日本語では、これまでも指摘されてきたように、(3)のように通常の述語否定形式（いわゆる内部否定形式）で表現すると、これには記述否定の読みしかなく、メタ言語否定を表すには、通常、(4)のように先行発言を名詞節化して否定する外部否定形式をとる。

(3) フランス王は禿げていない。(＃フランスに王はいないんだから。)

(4) フランス王が禿げている {なんてことはない / (など) ということはない}。
(フランスに王はいないんだから。)

また、メタ言語否定は、他者の、ことばの用法・形式に関する判断や思い込みに異議を唱えるのにも使用される（Horn (1985, 1989), Carston (1996)など）。(5)がその一例で、先行話者による *police* の発音の不適切性を指摘し、適切な発音を示している。

(5) *He didn't call the [pólis]; he called the [polís].*

この場合も日本語では、(6)のように通常の述語否定形式で表現すると、メタ言語否定としては不自然であり、(7)のように「のではない」という外部否定形式を用いるのが自然である（益岡（1991, 2007）, 工藤（1997）, 野田（1997）, Yoshimura（2013）など）。

(6) #彼は、「ボリス」を呼ばなかった。「ポリース」を呼んだのだ。

(7) 彼は、「ボリス」を呼んだのではない。「ポリース」を呼んだのだ。

だからと言って、日本語ではメタ言語否定は常に外部否定形式をとらなければならないというわけではない。吉村（2015）などで指摘されているように、「名詞句+ではない」のような形式でも次のようにメタ言語否定を表現することが可能である。

(8) フランス王は禿げではない。フランスに王はいないんだから。

(9) 彼が呼んだのは、「ボリス」ではない。「ポリース」だ。

このように見てくると、日英語のメタ言語否定に関して次の二つの問いが生じる。

問1：英語の否定文は記述否定とメタ言語否定で語用論的にあいまいとなるのに対して、日本語では、基本的に、この二つを言語形式上区別しなければならないのはどうしてか。

問2：日本語では、メタ言語否定は名詞節を「ない」で否定する外部否定形式をとるのが基本だが、名詞句だけを用いて「ではない」のような形式でも表現できるのはどうしてか。

特に問1に対しては、文法と語用論の関係を言語相対的に扱える理論が必要である。

本講演では、三層モデルの概略を示した後に、その観点から上記二つの問いに答えることになる。答えに至るまでの主要な要点のみ記しておく、次の通りである。

- ① 日本語は、私的自己による状況把握が公的自己による状況報告から独立する「私的自己中心」言語であるのに対し、英語は状況把握と状況報告が一体化する「公的自己中心」言語である。
- ② メタ言語否定の対象となるのは、他者の私的自己の思い（主観）に対応する「私的表現」であり、したがって、メタ言語否定は他者の思いを話し手がどのように受け止め伝えるかという「主観の客体化（=対象化）」の特殊なケースである。
- ③ 私的自己中心の日本語では、私的自己が公的自己より優位にあるので、公的自己が他者の私的自己の思いを受け止め伝えるときは、その私的自己の思いを「言語的に客体化する（つまりは他者化する）しかるべき言語標識」が不可欠であり、それがあって初めて公的自己の存在が保障されることになる。
- ④ 公的自己中心の英語では、公的自己の存在は基本的に定形文の人称・時制標示によって文法的に保障されるので（cf. 和田（2008））、公的自己のほうが私的自己より優位にある。その結果、英語では客体化を明示する言語標識を使用しなくても、公的自己の表現の中に他者の私的自己の思いを取り込むことができ、その際の公的自己の伝達態度は「文脈から推論的に」読み込まれることになる。

参照文献

- Carston, Robyn (1996) "Metalinguistic Negation and Echoic Use," *Journal of Pragmatics* 25, 309-330.
- Hirose, Yukio (2015) "An Overview of the Three-Tier Model of Language Use," *English Linguistics* 32, 120-138.
- 廣瀬幸生 (2024a) 『自分の言語学—ことばの主体性のありか—』 開拓社, 東京.
- 廣瀬幸生 (2024b) 「対照研究と言語使用の三層モデル」『日本語学』 43(3), 134-143.
- 廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子 (編) (2017) 『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』 開拓社, 東京.
- 廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・長野明子 (編) (2022) 『比較・対照言語研究の新たな展開—三層モデルによる広がりや深まり—』 開拓社, 東京.
- Horn, Laurence R. (1985) "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity," *Language* 61, 121-174.
- Horn, Laurence R. (1989) *A Natural History of Negation*, University of Chicago Press, Chicago.
- 工藤真由実 (1997) 「否定文とディスコース—『～ノデハナイ』と『～ワケデハナイ』—」『ことばの科学』 8, 65-102.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』 くろしお出版, 東京.
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探究』 くろしお出版, 東京.
- 野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』 くろしお出版, 東京.
- 和田尚明 (2008) 「公的自己中心性の度合いと西欧諸語の法・時制現象の相違」『ことばのダイナミズム』, 森雄一ほか(編), 277-294, くろしお出版, 東京.
- Yoshimura, Akiko (2013) "Descriptive/Metalinguistic Dichotomy?: Toward A New Taxonomy of Negation," *Journal of Pragmatics* 57, 39-56.
- 吉村あき子 (2015) 「帰属否定と記述否定」『欧米言語文化研究 (奈良女子大学文学部欧米言語文化学会)』 3, 37-70.

日本語における「名前」の形態統語論

新山聖也（筑波大学非常勤研究員）・田川拓海（筑波大学）

キーワード：分散形態論 固有名 人名 活用 文脈異形態

問題の所在：「名前」は形態統語論的に普通名詞と異なる振る舞いを見せることがある。分散形態論の枠組みでは、品詞を範疇未指定の **Root** と範疇化辞から為る構成物である (Arad 2003) と考えるが、「名前」については、更に特有の素性 $n_{[NAME]}$ を仮定することでその形態統語論的振る舞いを説明してきた (Ghomeshi and Massam 2009; Jambrović 2021)。以上の背景を踏まえ、本発表では、日本語においても、 $n_{[NAME]}$ を仮定することで、特に動詞由来の名前の振る舞いについて説明を行うことを試みる。

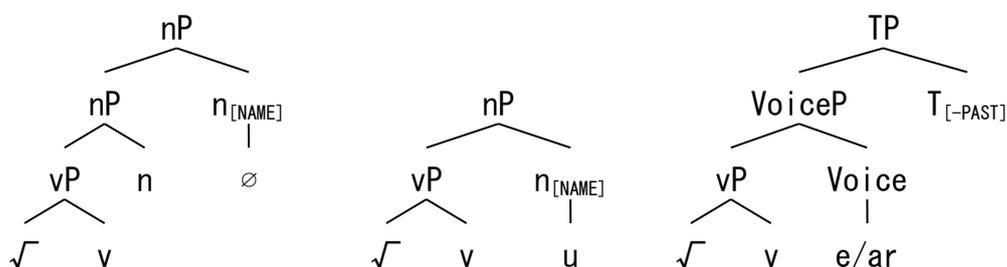
議論の流れ：本発表では、主に日本語における動詞由来の名前 (deverbal name) の活用を取り上げ、普通名詞と「名前」の関係について分析する。まず、動詞由来の普通名詞 (動詞転成名詞) は基本的に連用形を取るが、動詞由来の名前は、「ひかり」のような連用形のと「ひかる」のような終止形の2つのパターンを持つ点で特徴的である。そして、連用形の名前は普通名詞と連続的な振る舞いを見せ、終止形の名前は名前に特有の振る舞いを見せるという対立が存在する。(1) のように、連用形の名前の可否は動詞由来の普通名詞の可否と平行的であるが、終止形の名前はそうではない。また、終止形の名前は、(2) のように動詞の終止形に存在する自他の接辞が生起しない場合があり、動詞の終止形とも異なった振る舞いを見せる。

- (1) 動詞転成名詞：*茂り、*勝り、*譲り
 - a. 連用形の名前：*しげり、*まさり、*ゆずり
 - b. 終止形の名前：しげる、まさる、ゆずる
- (2) a. 動詞の終止形：osam- $\{e/ar\}$ -(r)u, tsutom- $\{e/ar\}$ -(r)u
 - b. 終止形の名前：Osam-u, Tsutom-u

このように、連用形の名前は動詞由来の普通名詞と共通項を持つが、終止形の名前は普通名詞とも、動詞の終止形とも異なった振る舞いを見せる。本発表では、この違いを、(3) のような統語構造によって扱うことを提案する。(3) の構造における n や v は範疇化に関わる素性であり、 $n_{[NAME]}$ は「名前」化に関する素性である。 $n_{[NAME]}$ は、名詞を「名前」化する場合はゼロ、動詞を直接的に「名前」化

する場合は‘u’として具現するものと仮定する。(3a)ではRootが動詞化、名詞化を経て「名前」化されるが、(3b)ではRootが動詞化のみを経て「名前」化される。すなわち、連用形の名前と終止形の名前の違いは、名詞化を経る(3a)と、動詞が直接的に「名前」化される(3b)の違いに由来すると考える。

(3) a. 連用形の名前 b. 終止形の名前 c. 動詞の終止形



(3a,b)の構造では、名詞化を経ている(3a)の可否は動詞由来の普通名詞の可否と平行的だが、直接的に「名前」化される(3b)はその限りではないことを捉えられる。また、そもそも連用形の名前と終止形の名前の2パターンが存在するという特徴についても(3a,b)の構造によって説明できる。更に、この構造で、終止形の名前と動詞の終止形の違いも捉えることができる。大関(2021)の枠組みを採用すると、動詞の終止形の統語構造には、(3c)のように自他に関わるVoiceが存在するが、名前の場合にはその限りではなく、vPが直接的に「名前」化される。結果として、終止形の名前においてVoiceを持たない(2b)が成立する。

なお、 $n_{[NAME]}$ は、活用以外の現象の分析にも有効な概念である。日本語では、名前に特有のアクセントが見られる(cf. Tanaka and Sugawara 2018)。更に、日本語の字音形態素「美」に関しては、名前と普通名詞で、“bi”と“mi”という異なる形態(文脈異形態)が現れる場合がある。いずれも、名前に特有の形態論的現象であり、 $n_{[NAME]}$ を条件にした文脈異形態やアクセントを仮定することによって分析できる。

(4) 普通名詞：こころ¹、ちから¹ 名前：こ¹ころ、ち¹から

(5) 普通名詞：優美(ゆうび) 名前：優美(ゆうみ)

結論：このように、名前に特有の素性 $n_{[NAME]}$ を仮定することで、日本語の名前の振る舞いを説明することができる。以上の議論は、普通名詞と同じ素材(Root)を基にして「名前」が作り出される過程を分析したものである。名詞がRootと名詞化辞(n)の構成物であるとするRoot仮説について考える上では、「名前」

の語形成について捉えることも、重要な課題と考えられる。

参考文献

- Arad, Maya (2003) “Locality constraints on the interpretation of roots: The case of Hebrew denominal verbs.” *Natural Language & Linguistic Theory* 21, pp.737-778.
- Ghomeshi, Jila and Diane Massam. (2009) “The proper D connection.” In Ghomeshi Jila and Ileana Paul, Martina Wiltschko (eds.), *Determiners: Universals and variation*, pp.67-96. Benjamins.
- Jambrović, Samuel. (2021) “Common names and proper nouns: Morphosyntactic evidence of a complete nominal paradigm.” *Proceedings of the Linguistic Society of America* 6, pp.815-828.
- 大関洋平 (2021) 「分散形態論と日本語の他動性交替」岸本秀樹 (編) 『レキシコン研究の現代的課題』 pp.1-23, くろしお出版.
- Tanaka, Yu and Ayaka Sugawara (2018) “Revisiting accent in Japanese given names: Stem-like accent with foot faithfulness.” *Proceedings of the Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL)* 13, pp.217-228.

機能的自他交替と語彙的自動詞・他動詞

キーワード: 統語論、反語彙主義、被動目的語、結果目的語、心理動詞

本田隆裕(大阪大学)・吉本真由美(関西学院大学)

本発表は反語彙主義の立場から、自他交替は機能範疇のレベルだけではなく、語根(Root)のレベルでも観察されることを、藤田・松本(2005)の3層分裂動詞句構造で示す。

英語では、内項が被動目的語か結果目的語かによって、自動詞文の容認性が異なる。

(1) a. Jennifer baked the potatoes. / b. The potatoes baked. (Levin 1993:243)

(2) a. She baked a cake. / b. *A cake baked. (影山 1996:161)

内項を結果目的語として解釈した場合のみ、(2b)の自動詞文は成立しない。また、(3b)の英語が(4b)の日本語の例に対応しているのに対して、(3a)と(4a)は主語・目的語という表面上の類似点は見られるが、両者の意味は全く異なり、(3a)は(5)の日本語に対応する。

(3) a. John worried Mary. / b. Mary worried. / (4) a. ジョンがメアリーを心配した。

b. メアリーが心配した。 / c. メアリーを心配した。 / (5) ジョンがメアリーを心配させた。

(1), (3)の自他交替を機能的自他交替と呼び、語彙的な自他の区別を別に仮定する。

藤田・松本に基づくと、他動詞、能格動詞の構造はそれぞれ(6a, b)のように考えられる。

(6) a. 他動詞: $[_{v1P} \text{動作主} + \text{原因項}_i [_{v1} [_{v2P} \text{原因項}_i [_{v2} [_{RP} R \text{対象}]]]]]$

b. 能格動詞: $[_{v2P} \text{原因項} + \text{対象}_i [_{v2} [_{RP} R \text{対象}_i]]]$ (線形順序は無視する)

(6a)の構造では、原因項が v2 指定部に外的併合され、v1 指定部に内的併合することで動作主としての解釈も持つ。例えば、John broke the vase.のような文で、John が意図的に花瓶を壊した解釈ではない場合、v1 は派生に含まれず、John は v2 から原因項の役割のみ受け取る。(6b)の能格動詞の構造では、R 補部に外的併合された対象が v2 指定部へ内的併合することで原因項の役割も加えて受け取る。これらの派生的 θ 標示は、(7)に示す影山(1996)の反使役化を統語的に表したものであると考えられることから支持される。

(7) a. 他動詞: $[_x \text{ CONTROL } [_y \text{ BECOME } [_y \text{ BE AT-z}]]]$

b. 能格動詞: $[_{x=y} \text{ CONTROL } [_y \text{ BECOME } [_y \text{ BE AT-z}]]]$

(6b)の統語構造及び(7b)の概念構造から、(1b), (2b)の容認性について考えてみよう。(1b)では被動目的語の the potatoes が統語構造における対象及び概念構造における y に相当する。芋はそれ自体、加熱により焼けた状態へ変化する性質を持つものであるから、v2 の原因項及び CONTROL の項としても機能することがわかる。他方、本発表では、v2 が Ramchand(2008)の *init* に相当し、原因項は事象の開始を表す項にもなると提案する。

(2a)は(8)の概念構造を持つが、v2 が事象の開始を表す項を取ると仮定すると、(2b)のように能格動詞の主語になる場合、即ち(6b)の構造になる場合は、a cake は開始を表す項となるため、結果目的語として解釈することは不可能(被動目的語としては可能)となる。

(8) [x CONTROL [BECOME [y BE AT-z]]]

一方、(3a)では John が原因項あるいは動作主と考えられ、(6a)の構造から派生されると考えられる。(3b)は反使役化の結果、Mary 自体が心配する性質を持ち、原因項として解釈される場合の派生であると言える。(4a)と(4b)の間には動作主や原因項の解釈の違いは関与しないため、(4a)の他動性は v1, v2 など機能範疇によるものではなく、(9)のような2層構造の R によるものであり、v2 のみ現れる点では能格動詞と同じであると提案する。

(9) [v_{2P} 原因項 + 経験者_i [v₂ [R_{1P} 経験者_{-i} [R₁ [R_{2P} R₂ 対象]]]]] (R₁+R₂=√BE WORRIED)
ここで、次の提案をする。項省略が可能な日本語では、(4b, c)のように R₁, R₂ のいずれの項が音形を欠く場合もあり得る。Pesetsky (1995:71)の記述に従い、日本語の動詞「心配する」の R は、√BE WORRIED となっており、「心配する」は対象を取る R₂ と経験者を取る R₁ の二つの R から成る語彙的他動詞である。英語他動詞 worry は使役動詞であることから、(3a, b)のように機能的自他交替を示すが、R₁ のみから成る語彙的自動詞である。さらに、以下の例から、日本語の「納得する」は一つの R から成る語彙的自動詞である。

(10) a. [太郎の株価の心配]が的中した。 / b. [(太郎の/株価の)心配]が的中した。

(11) a. *[(太郎の)結果の納得]が得られた。 / b. [太郎の納得]が得られた。

(10)-(11)はそれぞれの R が項を取り、名詞化機能範疇と併合した結果であると考えられる。

さらに、Pesetsky は(12)の構造で下位 Causer の上位 Causer 位置への移動を提案し英語の心理動詞の逆行束縛を説明したが、(13)の日本語の構造を(14)のように提案する。

(12) [v_P Causer [V-√annoy+CAUS_{aff} [PP DP-Exper [P-CAUS_P DP-Causer]]]]]

(13) 自分_iの母親(の病状)が太郎_iを心配させた。

(14) [v_{2P} 原因項 + 対象_{自分の母親(の病状)_i} [v₂-させ [R_{1P} 経験者_{太郎} [R₁ [R_{2P} R₂ 対象_{自分の母親(の病状)_i}]]]]]]]

「心配」の対象が原因項や事象を開始する項にもなり得ることは自然な解釈であり、(14)の内的併合が可能である。さらに、v2 は動詞化機能範疇であり、サ変動詞の場合は「す(る)」と具現されるが、使役の意味が加わると「させ(る)」と具現されると提案する。原因項は必ず対象が内的併合される必要はなく、「ビル」など他の項を外的併合することも可能である。

(15) a. *Bill worried John about Mary. / b. ビルがジョンにメアリーを心配させた。

(15a)では Bill と Mary により、(12)の上位と下位の Causer が不一致を起こし、非文となる。

参照文献

藤田耕司・松本マズミ. 2005. 『語彙範疇(I)動詞』. 東京: 研究社.

影山太郎. 1996. 『動詞意味論: 言語と認知の接点』. 東京: くろしお出版.

Levin, Beth. 1993. *English verb classes and alternations: A preliminary investigation*.
Chicago: University of Chicago Press.

Pesetsky, David. 1995. *Zero syntax: Experiencers and cascades*. Cambridge, MA: MIT Press.

Ramchand, Gillian Catriona. 2008. *Verb meaning and the lexicon: A first-phase syntax*.
Cambridge: Cambridge University Press.

同形異義の複合語
—意味関係に着目した日英対照研究—

木戸 康人
九州国際大学

N_1+N_2 型の複合語は、必要に応じて新たに作られ、理解されうる (竝木 2009: 57)。竝木 (2009: 56) は、例として「貯金箱箱」を取り上げ、 N_2 が「箱」の場合、 N_1 と N_2 の間の意味関係は「～を入れるため」という収納の解釈が最も頻繁である一方、「材質」や「目的・用途」など他の関係もありうると述べている。要するに、記憶にない複合語でも、 N_1 や N_2 の語義と既存の類例に照らした類推により、多くは文脈なしで解釈できると竝木は述べる。本研究はこの枠組みを前提に、母語話者の解釈選好を調査データで実証すること、また、日英比較と統計モデルにより、その傾向が日本語固有なのかどうかを定量的に検証することを目的とする。

この前提を受け、Kido (2025) は Snyder (2012) の *Generalized Modification (GM)* 仮説の観点から日英対照研究を行った。GM とは、複合語の前の語が後ろの語を修飾し、複合語を前の語と語用論的に適切な関係にある後ろの語の下位型と解釈する仮説である。英語や日本語のような GM-positive 言語では、前置詞や後置詞なしに新規複合語を形成でき、意味関係に依存せず解釈できる。一方、スペイン語やフランス語のような GM-negative 言語では、語と語の間に前置詞が必要で直接形成できない。この仮説が正しければ、GM-positive に分類される日本語と英語の話者は、どの意味関係でも質的に同様の解釈傾向を示すはずである。この予測を検証するため、Kido (2025) は日本語話者と英語話者に対し、Bing Image Creator で作成した同形 (N_1+N_2 は同一) だが意味関係が異なる複合語 (5 複合語 \times 3 関係 = 15 項目) を一項目ずつ文脈なしで提示した。提示順は協力者ごとにランダム化し、同一複合語に対する 3 関係の順もランダムとした。各項目は 4 段階のリッカート尺度で評定した (図 1 は便宜上の例示で、調査で同時提示は行っていない)。なお、日本語話者には日本語で、英語話者には英語で複合語を提示した。

その結果、日本語話者も英語話者も意味関係が形 (Shape) の複合語を好むが、色 (Color) は好まないという共通傾向が見られた。一方、素材 (Material) では英語話者の容認度が日本語話者より有意に高いことが明らかになった。ただし、Kido (2025) には課題が二点あった。第一に、順序尺度をカテゴリ化した上で、 χ^2 検定および Fisher の正確検定を用いており、順序情報が失われるという統計的方法論上の問題がある (課題①)。第二に、日本語話者 125 名に対して英語話者は 13 名と標本が不均衡であり、標本設計上の問題がある (課題②)。

本研究では、Kido (2025) の二つの問題に対処し、竝木 (2009) の枠組みを補強するために、累積ロジットモデル (CLM: Cumulative Link Model) と累積ロジット混合モデル (CLMM: Cumulative Link Mixed Model) を用いた。まず固定効果を CLM で概観し、続いて参加者にランダム切片を持つ CLMM を推定した。固定効果は *NativeLanguage* \times *SemanticType*、*NativeLanguage* = 'Japanese' とした。係数の向きは英語 - 日本語に定義した。 β は累積ロジット係数 ($\log(\text{OR})$; \log は自然対数) で、効果量はオッズ比 (odds ratio; OR) = $\exp(\beta)$ を用い、OR(英/日) (=英語の累積オッズを日本語の累積オッズで割った値) として報告する。この定義より、 $\beta > 0$ は OR(英/日) > 1 (英語話者優位) で、 $\beta < 0$ は OR(英/日) < 1 (日本語話者優位) と解釈する。交互作用係数は、 $\beta_{\text{int}} = [\text{英-日} | X] -$

[英-日 | 基準関係] (=Xにおける log OR(英/日) から基準関係の log OR(英/日) を差し引いた値) と定義し、交互作用の効果量にはオッズ比の比 (ratio of odds ratios; ROR) を用いた。すなわち $ROR = \exp(\beta_{int}) = OR(英/日 | X) / OR(英/日 | 基準関係)$ とした。交互作用の基準関係は表 4 では color、表 5 では shape である。調査項目は Kido (2025) と同様に 5 複合語 × 3 関係の 15 項目である。協力者は日本語話者 N = 125 (Kido (2025) と同一)、英語話者は N = 103 に増やした (Kido (2025) より +90)。各項目は 4 段階のリッカート尺度で容認度を評定した。

本研究の仮説は、交互作用なしである (H_0 : 各意味関係での言語差は同じ / H_1 : 少なくとも一つの意味関係で言語差が異なる)。交互作用の有意性は、 $\beta_{int} = 0$ ($\equiv ROR = 1$) を帰無仮説とする検定により判定する。GM 仮説に基づくと、日本語と英語はいずれも GM-positive であるため、意味関係によらず同様の容認傾向が予測され、 H_0 は棄却されないはずである。

まず、Kido (2025) の結果と照合できるよう Pearson の χ^2 検定も行ったが、2×2 表で期待度数が小さくなる可能性に配慮し、有意判定は両側の Fisher の正確検定を優先した。その結果、表 1 の灰網掛け (Fisher $p < .05$) で帰無仮説が棄却された。特に、素材の意味関係では、5 つの複合語すべてで群間差が有意で、方向は一貫して英語話者の容認度が日本語話者より高かった。

次に、表 2 (CLM) では、色 (OR(英/日) = 2.22) と素材 (1.86) は英語話者の容認度が有意に高いが、形 (0.72) は日本語話者が有意に高かった。この方向性は表 3 (CLMM による単純効果) でも同じ傾向が見られ、3 関係すべてで群間差は有意だった (形: $p = .0033$ 、色と素材: $p < .0001$)。

さらに交互作用の検定では、基準関係 = 色 (表 4) のとき、形の群間差が色より有意に小さかった ($ROR = 0.31, p < .0001$) が、素材は色と有意差はなかった ($0.80, p = .149$)。一方、基準関係 = 形 (表 5) では、色 ($3.22, p < .0001$) も素材 ($2.57, p < .0001$) も形より有意に大きかった。したがって、言語差の大きさは意味関係によって変化し、交互作用が有意であることが示された。なお、この結果は表 3 (単純効果) と一致し、3 関係すべてで群間差は有意であり、色と素材は英語話者が高く、形は日本語話者が高い点で表 2 の CLM と一致した。

以上をまとめると、表 2-5 の CLM と CLMM および交互作用の検定の結果から、言語×意味関係の交互作用が有意となり、 H_0 は棄却され H_1 が支持された。すなわち、両言語間の差は意味関係によって異なることが示唆された。したがって、GM 仮説からの予測 (GM-positive 間の一貫性) は本研究で得られたデータでは支持されなかった。

さらに、先行研究に対する本研究の位置づけをまとめる。まず、Kido (2025) の統計的方法論上の課題① (順序尺度に適さない検定) に対しては、順序データに適した CLM と CLMM を採用し、カテゴリ化により失われる順序情報の欠点を回避した (表 2-5)。また、標本設計上の課題② (標本の不均衡) に対しては、英語話者を N = 103 に増やし、群間の不均衡を緩和させた。次に、並木 (2009) の枠組みでの母語話者における解釈選好の判断基準の実証として、CLMM により意味関係ごとの単純効果と交互作用を推定し、話者群×意味関係の効果を統計的に示した (表 3-5)。また、言語間比較の定量解析として、CLM と CLMM で日本語と英語を比較し、交互作用の有無を統計的に検定した結果、群間差は意味関係によって異なることを示した (表 2-5)。

総合すると、言語差は意味関係に依存して異なる (形が日本語話者優位 / 色と素材は英語話者優位)。なお、GM 仮説の予測は本研究では支持されなかったが、GM という抽象原理自体は妥当である。したがって、どの関係が選ばれやすいかや言語間差が何に由来するかを説明するには追加の条件の明確化が必要であり、その具体化は今後の課題である。



図1 意味関係が異なるが同形の複合語 (Crocodile rug)

表1 χ^2 検定と Fisher の正確検定の結果

<i>N-N Compound</i>	<i>Condition</i>	χ^2 検定		Fisher の正確検定 (両側)
		χ^2	$\chi^2 p$	<i>Fisher p</i>
Strawberry tire (いちごタイヤ)	Shape	0.064	.801	.815
	Color	18.490	< .0001	< .0001
	Material	4.046	.044	.032
Chameleon chair (カメレオンいす)	Shape	0.000	1.000	1.000
	Color	6.442	.011	.010
	Material	3.742	.053	.045
Crow mailbox (カラスポスト)	Shape	0.007	.933	.732
	Color	3.030	.081	.069
	Material	7.238	.007	.005
Caramel drum (キャラメルドラム)	Shape	4.038	.044	.034
	Color	21.560	< .0001	< .0001
	Material	20.704	< .0001	< .0001
Crocodile rug (ワニじゅうたん)	Shape	1.031	.310	.280
	Color	2.213	.137	.093
	Material	19.394	< .0001	< .0001

* 灰網掛け = Fisher の正確検定 (両側) で $p < .05$ 。 χ^2 は 2×2 の Pearson ($df = 1$)

表2 CLM の結果

<i>Semantic Type</i>	β (英-日 X)	<i>SE</i>	<i>z</i>	<i>p</i>	<i>OR</i> (英/日)	<i>95% CI (OR)</i>
Shape	-0.3287	0.113	-2.90	.0037	0.72	[0.58, 0.90]
Color	0.7968	0.116	6.90	< .0001	2.22	[1.77, 2.78]
Material	0.6205	0.112	5.55	< .0001	1.86	[1.49, 2.32]

* β (英-日 | X) = $\log OR$ (英/日 | X)。 OR (英/日) > 1 は英語話者優位, OR (英/日) < 1 は日本語話者優位。

表3 CLMM による各意味関係の単純効果の結果

<i>Semantic Type</i>	β (英-日 X)	<i>SE</i>	<i>z</i>	<i>p</i>	<i>OR</i> (英/日)	<i>95% CI (OR)</i>
Shape	-0.3250	0.120	-2.94	.0033	0.70	[0.56, 0.89]
Color	0.8186	0.117	7.03	< .0001	2.28	[1.80, 2.85]
Material	0.5920	0.108	5.47	< .0001	1.81	[1.46, 2.23]

表4 CLMM の交互作用 (基準関係=色)

交互作用	β int	<i>SE</i>	<i>z</i>	<i>p</i>	<i>ROR</i>	<i>95% CI (ROR)</i>
形との交互作用	-1.17	0.166	-7.06	< .0001	0.31	[0.22, 0.43]
素材との交互作用	-0.227	0.157	-1.44	.149	0.80	[0.59, 1.08]

表5 CLMM の交互作用 (基準関係=形)

交互作用	β int	<i>SE</i>	<i>z</i>	<i>p</i>	<i>ROR</i>	<i>95% CI (ROR)</i>
色との交互作用	1.17	0.166	7.06	< .0001	3.22	[2.33, 4.46]
素材との交互作用	0.944	0.160	5.89	< .0001	2.57	[1.88, 3.52]

参考文献

- Kido, Y. (2025, June 25). *Same compounds, different relations: A preliminary study of Japanese and English* [Conference presentation]. SKASE International Conference, Pavol Jozef Šafárik University, Košice, Slovakia.
- 竝木崇康 (2009). 『単語の構造の秘密 日英語の造語法を探る』 開拓社.
- Snyder, W. (2012). Parameter theory and motion predicates. In V. Demonte & L. McNally (Eds.), *Telicity, change, and state: A cross-categorical view of event structure* (Oxford Studies in Theoretical Linguistics, Vol.39, pp. 279–299). Oxford University Press.